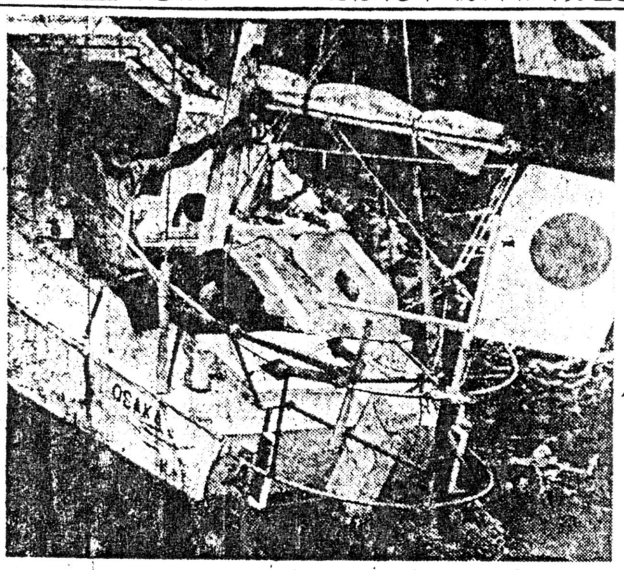
お帰り「信天翁二世」

堺・石津港に勇姿

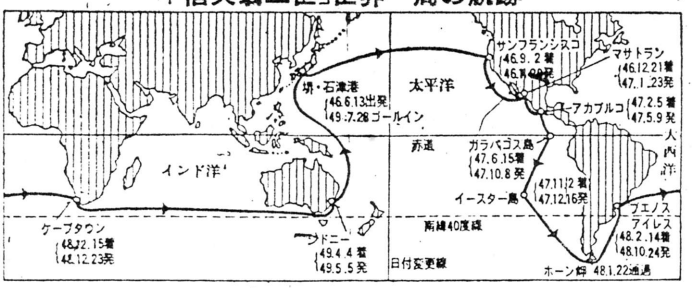
三年二ヵ月ぶり 手製の世界一周

天測が頼り 無線機も積まず



世界一周を終えて帰って来た「信天翁二世」から手をふる青木洋さん（28日午後0時15分、堺港沖で）

「信天翁二世」世界一周の航跡



手づくりのヨット「信天翁（あほうどり）二世」で、ひとりぼっちの世界一周航海を続けていた高石市羽衣五丁目、青木洋さん(28)は二十八日午後三時十分、三年二カ月ぶりに堺市の石津港に帰港した。予想外の帰港で出迎えは少なかったが、コロンブス、マゼランの時代そのままに、星と、ら針盤、海図だけを頼りに"七つの海"を乗り切った青木さんに暗しみのない笑顔を送った。手製のヨット上で一人、無線機も積まずに世界一周に成功したのは世界でも初めてではないかという。

この朝八時半ごろ、「信天翁二世」の所属するロイヤル石津ヨットクラブの「難波」＝旗船難波艇長(28)＝が泉佐野沖を元気に帆走している「信天翁二世」を発見、堺海上保安署の巡視艇「ちぬかぜ」が、同ヨットクラブの長堺市柏木町、薬品卸業弘恩商さん(28)を乗せて確認に向かい、正午すぎ泉大津沖で、接触した。「信天翁二世」は「ちぬかぜ」の誘導で、午後二時前、大阪港西沖にある検疫ひょう泊に停泊、係官がヨットに乗り込み検疫をすませたあとヒールをおろして「ちぬかぜ」に先いれされ、待ちに待った母港へ。大漁旗をかかげた地元の親船やヨット約二十隻の出迎える中を午後三時十分、堺市・石津港に接岸した。

港には父親富夫さん(56)、母親（無答港、難波）に続いて今度が五番目。無線機も積まず、自作艇で一人というの例がなく、大きさでも「信天翁二世」が抜かいである。

注▽日本人のヨットが世界一周に成功したのは白鳳号（四人乗り組み）、白雲号（三人乗り組み）、自作艇、ひねもす二世（三人乗り組み）、マーメイド三世

年老さん(25)、妹ひでえさん(23)の二家や、友人、青木さんを一目見たいという一般の人がを数時めかけ、狭い港は二百余の人で埋まった。岸壁で入国、通関手続きを終えた青木さんは、千百四十一日ぶりに日本の土を踏みしめ、もみくちゃの歓迎を受けた。

「信天翁二世」は全長六・五メートル、幅二・二メートル。二本マストのケッチで、青木さんが二年がかりでつくり上げた。エンジン、無線機、方向探知機などの近代装備は一切積まず、天測に頼って航海を続けた。

四十六年六月十三日、石津港を出発、八十一日間で太平洋横断に成功。メキシコ・マサトラン港では、ヨットのいたみがひどかったため、いったんは世界一周を断念したが、両親やヨット仲間の温かい励まで再起。メキシコ・アカプルコ、ガラパゴス島、イースター島を経て四十八年一月二十二日、「恐怖の岬」と呼ばれる南米最南端のホーン岬を、日本人として初めてヨットで通過。ブエノスアイレスから五十二日間で大西洋を横断。続いて百二日間でインド洋の横断にも成功。ことし五月五日シドニーを出発、日本をめざして帰途についた。

この間、ガラパゴス島では流行性肝炎にかかり、ホーン岬や大西洋などで再三転覆したり、クジラと衝突するなど何回も死と直面したが、奇跡的に無事だった。